

## 第Ⅱ章 調査概要

### 1. 調査地域

今回報告する調査地域は、平城宮西辺部の西面中門（佐伯門）から同北門（伊福部門）推定地に至る、西面大垣沿いの南北約280m、東西約110mの範囲である。北は県道奈良谷田線（通称一条通り）、西は県道木津郡山線、東は宮跡内を北から南へゆるやかに蛇行しつつ流下する用水路で囲まれており、1973年以降、当地域には平城宮跡資料館・収蔵庫等が建設され、現在では発掘調査および遺物整理・収納の基地となっている。

本調査地域を当研究所の遺跡表示方法にしたがってあらわすと、6ADC区G・H・K・L・M・N・O・P地区、6ADD区L・M・N・O・P・Q地区、6ADE区A・B・K地区に相当する。この地域の西南隅部分、すなわち西面中門付近は第25次調査区に属し、すでに報告済みだが、馬寮官衙域の遺構を一部含んでいるため、重複をいとわず本報告に一部を再録することとした。西北隅の一画は3軒の民家が現存しているため調査が及んでいない。なお、当地域の西方において西一坊大路にかかわる調査を数件実施している。いずれも小規模な調査であるが、大路の両側溝を検出してその幅員を確認し、また西面大垣の堀地の状況を明らかにするなどの成果をあげたものも含まれており、馬寮地域における建物配置等を考える上で重要な関連を有すると思われるので、それらのうち第88-1次、第88-13次および第103-14次調査の成果も本書に収めることとした。調査地区・面積・期間等を取りまとめて Tab. 1 に示す。

調査地域の  
区・地区名

西一坊大路  
の調査

(調査回数)	(調査区・地区名)	(調査期間)	(発掘面積)
47 次	6ADD—L・O	1968・5・16～68・8・26	33.0 a
50 次	6ADD—M・N・P・Q	1968・7・12～68・10・15	33.0 a
51 次	6ADD—L・M・O・P	1968・9・7～68・12・11	37.6 a
52 次	6ADC—H・K・M・N	1968・11・18～69・2・26	35.0 a
52次(補)	6ADC—P・R	1969・5・8～5・14	1.3 a
59次(北)	6ADC—M・O・P	1969・12・20～70・4・3	39.0 a
59次(南)	6ADC—O・P・Q	1970・1・6～70・4・1	16.0 a
63 次	6ADC—G・H・L・M	1970・5・1～70・7・27	44.6 a
71 次	6ADD—Q・N, 6ADE—A・B・K	1971・2・22～71・4・10	40.0 a
88—1 次	6ADB—I	1974・4・5～4・16	0.8 a
88—13次	6ADB—M	1974・9・19	0.1 a
103-14次	6AGA—P・Q, 6AGG—B	1978・1・9～78・3	5.0 a
127 次	6ADC—L	1980・10・13～80・12・1	7.8 a

Tab. 1 調査期間と発掘面積

1) 『平城宮報告IX』。

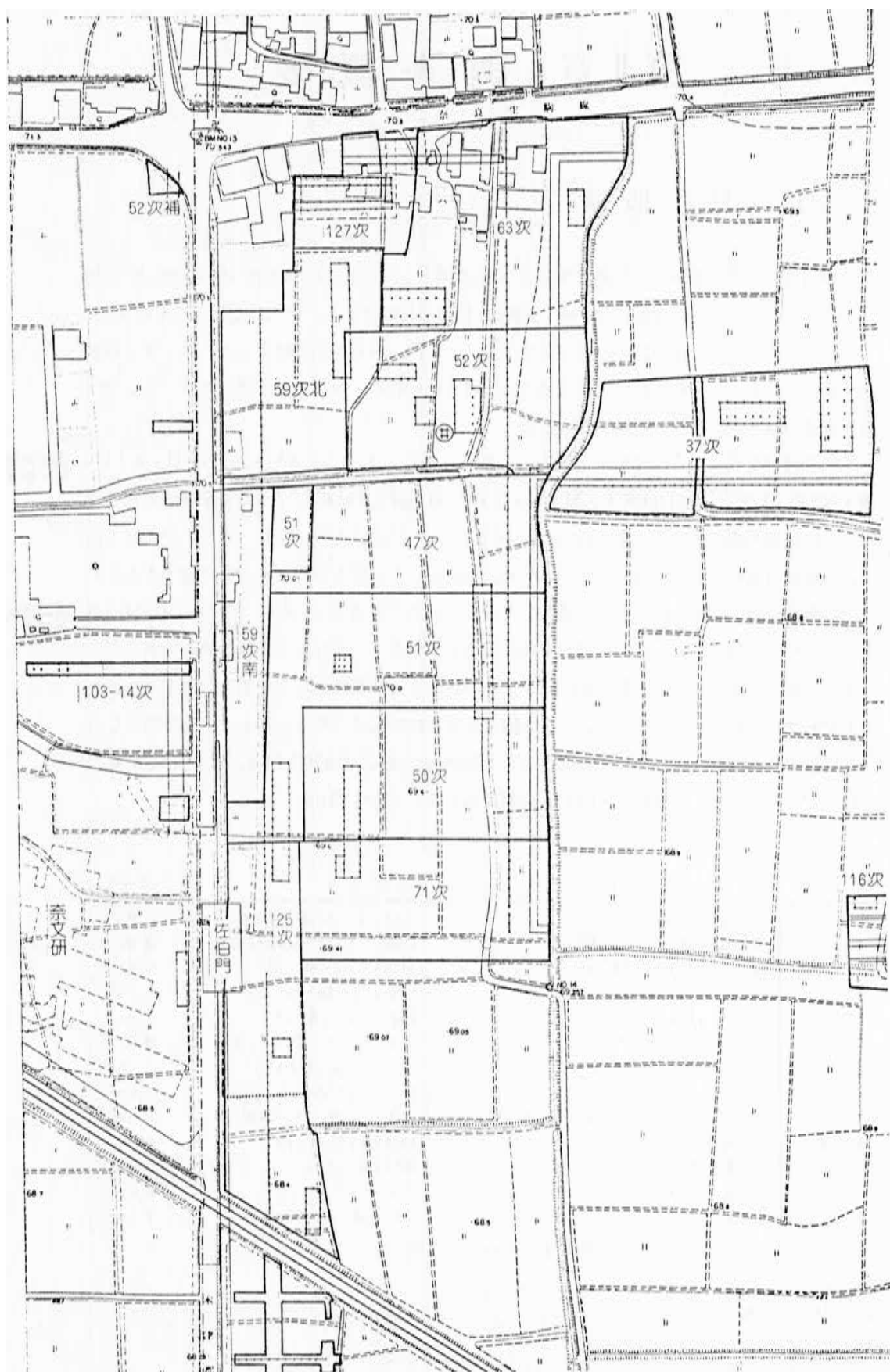


Fig.1 調査地域

## 2. 調査経過

- 9回に分けて行なった馬寮地域の発掘調査は、3つの段階に区分してたどることができる。調査を3段階に区分
- まず、1968年度にあいついで実施した第47次、第50～52次調査を第1段階とすると、翌1969・1970両年度の第59次北・南、第63次、第71次調査は第2段階と捉えられ、第127次調査は約10
- \* 年後になって補足的に行なったものとみなせるのである。第1段階・第2段階はともに平城宮跡資料館・収蔵庫等の建設に伴う事前調査であり、前者は対象地域のほぼ中央部、後者はその周辺部（北・南および西）の調査にあたる。また第127次調査は、当地域北辺の民家買い上げによって国有地が拡大し、その部分に見学者用の便益施設をつくるために行なった事前調査である。
  - \* 調査の成果は、次数が進み発掘面積が拡大するにつれ次第に詳しさを増していったが、大きな画期をなしたのは第1段階の末、すなわち第52次調査時のことであった。つまりこの時点ではじめて当地域が馬寮跡に相当することが想定でき、遺構群の分期と大まかな変遷の構図が組み立てられるようになったからである。
- 以下においては、調査後間もなく作成した調査終了報告や調査概報にしたがって、その間の
- \* 事情を述べることにしよう。遺構の名称や分期等については調査直後のものを用いるので、本報告の内容とは若干相違する点もある。なお、第1・第2段階の各調査はほぼ継続して行ない、一部は併行して進んだこともあったが、土盛地の関係から、調査区は連続せず飛び飛びになっている。

### A 第47次調査

- \* 調査地域は「西宮」比定地のほぼ中央、前年度に行なった第37次調査区域の西側に接する。第1段階
- 平城宮時代に属する遺構としては掘立柱建物3棟、柵2条、溝2条を検出しただけに過ぎない。
- 発掘区東部では、南北溝 SD5960（幅3.0m）と南北柵 SA5950（柱間2.7m）が平行して走る。その西側に東西棟の掘立柱建物 SB5951（2間以上×2間、柱間2.7m）と南北棟 SB5955（1間以上×2間、柱間2.4～2.7m）があり、SB5951から西へ32m離れて南北棟の掘立柱建物 SB5965（3
- \* 間×2間、柱間1.8～2.0m）があった。溝 SD5961（幅1.0m）は発掘区中央を東西に横断し、南北溝 SD5960に注いでいる。そのほかの遺構としては、柵 SA5941（柱間5.6m）と平城宮廃絶後のものと考えられる小規模な掘立柱建物数棟と井戸がある。
- 出土遺物には瓦・土器があるが、遺構が稀薄なのと同様遺物も少量である。

### B 第50次調査

- \* 第50次調査は、日時の上では第47次の後半と併行する。土盛地の関係から隣接地では実施できず、第47次調査区の南方において1調査区分だけ間隔を空けた地域で行なった。西面中門を含む第25次調査区の東北に接するところである。なお、調査次数が2次分飛ぶが、第48次は第

○○○○○ 2次朝堂院地区における東朝集殿の調査（1968年5月20日～9月18日）であり、第49次調査は宮跡西北隅に近い民家密集地の一画における住宅建設に先立つ小規模な調査（1968年6月3日～7月30日）である。

第50次調査では、掘立柱建物5棟、同柵1条、溝2条を検出し、その状況から発掘区内を3小区に分けて捉えることができた。 \*

**東部** 南北柵 SA5950 とその東方約 4 m 隔てて並走する 2 条の南北溝 SD5950・6061 を検出した。このうち SA5950・SD5960 は、先に北方で行なった第47次調査で検出したものの南への連続部分である。柵 SA5950 は14間分を検出し、この柵造営時の足場穴かと思われる小型の柱抜取痕跡が一部重複している。SD5960 も柵に沿ってさらに南の発掘地域外へ延びている。この溝の埋土からかなりの量の藤原宮式の瓦を採集した。SD6061 は著しく削平されており、詳細は不明。柵 SA5950 の西側では建物の南妻 1 間分を検出した。これは第47次調査で一部発掘していた南北棟建物 SB5955 の南妻と推定される。 \*

**中央部** 南半において多数の柱穴を検出したが、建物としてまとめ得るものは SB6075（桁行 4 間×梁行 2 間、柱間 5.5 尺等間）、SB6080（桁行・梁行とも 2 間、柱間 8.5 尺）の 2 棟に過ぎない。

**西部** SB6100・6095 の 2 棟の掘立柱建物を検出した。SB6100 は柱間 8 尺で、東側柱筋において南へ拡張して追求した結果、桁行 16 間、梁行 2 間と判明した。この建物は第25次調査で検出した SB3690 と南妻柱筋が揃っており、同時期の造営によるものと推定される。その北西にある SB6095 は桁行 3 間、柱間 10 尺、梁行 2 間、柱間 8 尺の東西棟建物である。 \*

平城宮造営前の遺構として古墳時代の溝 SD6060（幅約 2 m）を検出した。これは SD6100 を西北から斜に横切って東南に抜けるが、SB6100 の遺構保存のため一部を発掘するに留めた。 \*

以上の遺構が互いに時間的にどのような関係にあるのか、あるいは一官衙に属するものとしたばあいどのようなまとまりを示すかについては未だ判断し難い。

## C 第51次調査

第25次調査区およびその東北の第50次調査区に北接し、第47次調査区の南に接する位置である。平城宮の遺構としては掘立柱建物 8 棟、柵 2 条などがあり、ほかに弥生時代・古墳時代および中世の遺構も検出した。 \*

**溝と柵** 調査区東端には溝 SD5960（幅 2 m）が北から南に流れており、その西 7 m には南北柵 SA5950（柱間 2.6 m）がある。この溝・柵の南・北延長部は第47・50次調査ですでに検出済である。一方、調査区の西端近くには南北柵 SA3680（柱間 2.6 m）がある。この柵の南延長部は第25次調査でみつかり、今回の間分を加え総長 15 間以上となった。北延長部分はさらに未調査地へと続く。SA5950 と SA3680 との距離は 84 m ある。 \*

**長い建物** 調査区の東端部には、南北柵 SA5950 の西 5.5 m のところに、南北棟建物 SB5955（8 間×2 間）と SB5956（9 間×2 間）が南北に相接して建っている。両棟の間隔は桁行 2 間分あり、その間にも柱穴が存在することから、両棟は棟続きで、間の部分は馬道をなしたとも考えられる。発掘区の西端近くでも、南北柵 SA3680 の東側で、南北棟の長大な建物 SB3690 を検出した。これらの長い建物は第47次調査の SB6100 と類似しており、当地区の性格を決定づ \*



けるであろう極めて独特なものである。

○○○○○

**その他の建物** 7棟検出し、そのうちの6棟は発掘区の北半にある。南半には南北柵 SA3680の西側に2間×2間の小建物があるのみ。

以上の建物群をA・B2期に分けることができた。長い建物3棟(SB3690・5955・5956)は  
\* 両南北柵(SA5950・3680)によって区画した地域の東端・南端に配した建物として、柵とともに同時期に属する(A期)と考えられるのに対して、SB6120はその西がSA3680と重複するため新しいものと想定され、SB6140はSB6120と南の妻通りをそろえるのでこれと同時期(B期)と考えるのである。

以上のほかに、前期弥生式土器を含む土壌や竪穴住居のほか、古墳時代の土器を包含した自然流路を検出した。

## D 第52次調査

この調査は第47次調査区に北接する地域で行なった。調査区東部で検出した南北柵 SA5950 **第2段階**は、第47次調査以来、第50・51次調査においても検出し、連続したものと捉え得る。しかも、すべての掘立柱建物はこの柵の西側にあるので、この柵 SA5950 がこの地区の東を限るものと  
\* 考えられる。84mへだてて西辺に位置する南北柵 SA3680 との間が一つの官衙ブロックを形成するのである。また、調査も第4次目を数え、遺構は柱穴の重複関係や建物配置から3時期に大別して捉えられるようになった。

**A期** 発掘区東端近く、南北柵 SA5950 の東16mに南北築地 SA6150 がある。SA5950 の西には、6間×2間の南北棟建物 SB6170 (東3mに10間分の柱穴を伴う)、さらに西に北妻を SB6170  
\* の北から3間目の柱筋に揃えた SB6177 がある。この建物の北方20mにある SB6187 も小規模ではあるが柱間寸法が上記建物と一致するので同時期と考え、SB6177 と SB6187 の間にある SB6180 も東妻柱が SB6177 の西側柱筋と揃うのでこの時期に入れる。

**B期** 掘立柱建物4棟と井戸1基がある。SB5951は第47次調査で南妻を見つけていたが、桁行14間、梁行3間の南北棟と判明、この北にある SB6172、西辺で検出した SB6185 は共に SB  
\* 5951と柱筋が揃う。また、SB6185とその北にある SB6195は東妻を揃えて配置されているので同時期と考えられる。SB5951の西南方に井戸 SE6166が掘られている。この井戸から「主馬」と墨書された土師器杯等が出土、4次にわたって調査してきた当地域を「馬寮」跡と見る手懸りが得られた。

**C期** 第52次調査区内においては、C期およびそれ以降の建物は少ない。SB6190・6165・61  
\* 67・6195・6186などが候補となるが、調査地外にかかり全貌が判明しないものの他はいずれも小規模なものである。SB6170・6171・6173・6188などは時期不明。

2条の南北柵 SA5950 と SA3680 に挟まれた東西約84m(28丈)の官衙ブロックは馬寮と考えられるに至ったが、その北限については調査地外にあるため不明、だが西面北門から東へ延びる道路の位置に仮定できよう。南限については、SA3680の南端が西面中門の北側にあるこ  
\* とからここに考え、とすれば官衙ブロックの南北長は約250m以上となろう。

## E 第59次調査（北・南）

馬寮官衙域西辺部の調査である。調査地は第47・50・51次調査の西側（南区）および第47次の北・第52次の西側にあたる南北に長い範囲（北区）で、南・北両調査区の間は約43mほどあく。

掘立柱建物27棟、柵4条、溝2条、土塋5などほか、鍛冶工房跡を検出。柱穴の重複関係や建物配置から少なくとも4期に分け得ることとなった。

**A期** 調査区西端部にある南北柵 SA3680は24間分検出、さらに北へ延びる。この西約10mの位置に西面大垣の東側溝 SD6303（幅1.4m残存）および犬走り SA6370の一部が遺存していた。SA3680の東では長大な南北棟 SB6425がある。この建物は当初7間×2間、のちに改造して北に6間分を付け足し、桁行13間となった。南北柵 SA6341もこの期に属する。

**B期** A期の柵 SA3680が取り除かれ、西面大垣に至る範囲まで拡げて利用するようになった。新たに掘立柱建物4棟（SB6403・6380等）、土塋1（SK6350、南北42m、東西6m、深さ60cm）が造営される。鍛冶工房 SB6360もこの時期に操業された。柱穴は円形で小さく、堅固な建物とはみなし難い。内部や周辺から焼土・韃羽口片・鈹滓等が多く出土し、建物内のすり鉢状土塋（SK6358・6359・6361・6362）は炉と考えられる。SA3680の廃絶後に設けられた南北に長い長方形の大土塋があり（SK6350）、内部には焼土等工房からの投棄物が充満しており、工房に関係するものとみられた。

**C期** 建物配置はA・B両期に比較して大きく変化し、大規模な改造が認められる。この時期に属するものとしては掘立柱建物5、柵1などがある。調査地西北隅のSB6400は4間×11間以上で東西に廂がつく南北棟である。その東に柱通りを揃えて3棟の東西棟 SB6185・6195・6385が並ぶ。それぞれ東半部は第52次調査で検出、今回全規模が判明したものである。

**D期** C期とほぼ同位置で似た構造の建物を造営している。掘立柱建物7棟、溝1条が含まれる。調査地西北隅のSB6401は4間×7間の東西両廂付南北棟で、礎盤として塼を用いる。廂は広廂。この東14mにある東西棟 SB6190・6381は南北に並び、柱通りが揃う。

今次調査とこれまでに行った第25・47・50・51・52次調査結果をまとめ、次のような総合的見解がとれるようになった。

宮の西面中門を入ってすぐ左手には、西面大垣と平行して南北に延びる2条の柵がある。北へ約215m確認しており、西面北門に通ずる東西の宮内道路にまで達していたのであろう。両柵の東西間隔は約84mある。建物はこの2条の柵で区画された範囲の周辺部に配置されており、中央部は広い空閑地となる。ここに東西約84m（28丈）、南北約250m（80丈余）、約2.1haの広さをもつ一つの官衙域が想定できる。官衙の性格を推定する手懸りとして、井戸 SE6166（第52次調査）出土の土師器に墨書された「主馬」がある。「主馬」の名をもつ官司には東宮の「主馬署」と令外官の「主馬寮」とがある。「主馬寮」は奈良末から平安初頭までの25年間、「左（右）馬寮」を統合して機能していたと考えられ、墨書土器が奈良時代末期のものである点と符合する。またこのブロックは東宮の一部署である主馬署にしては大き過ぎる。したがって、

ここを主馬寮およびその前身の左（右）馬寮と考えて大過なかろう。平安宮古図における左右馬寮の位置・規模とも類似しており、この点からも上の想定は裏付けられる。なお、平安・平城における当該官衙の東西幅を比較すると、南面西門に通ずる南北の道路と西面大垣との間を平安宮では2分してその1を占め、平城宮では3分の1を占めている。

## F 第63次調査

第52次調査区の北、第59次北調査区の東に接する。馬寮と推定している官衙の北限と東北隅の状況を明らかにすることに主眼を置いた。本調査では掘立柱建物14棟、築地2条、柵1条、溝8条などを検出、柱穴の重複関係や建物の配置から、A期・B期・C期およびそれ以降に分けて理解した。

- \* **A期** 調査区中央部東寄りにある南北柵 SA5950はこの官衙の東限線で、今回23間分を検出、北端はさらに北へ延びる。調査区西北方にある東西方向の築地 SA6475はこの官衙の北を限るものと思われ、東はSA5950に接続する。柵 SA5950と築地 SA6475の接点がこの官衙の東北隅をなし、この入隅では築地の下に木樋の暗渠を設けて水を北外方へ流すようになっている。築地 SA6475の北にある平坦地 SX6502は西面北門から東に延びる宮内道路の一部であろう。調査区西南部の SB6450は7間×4間の南北廂付東西棟で、A期で唯一の両廂付建物であり区画内における位置からみて馬寮の正庁に近い性格が想定される。この建物の北にある SB6469は2間×4間以上の東西棟で、SB6450と桁行の柱通りが揃う。

調査区東部は馬寮東方にある別な官衙に属する。第37次調査と一連のものであろう。南北方向の築地 SA6150はこの官衙の西辺を画するもので、SA6475のほぼ東延長線上で東に折れ曲

- \* り、調査区外に延び、第37次調査で検出した東西柵 SA5270と合するものと見られる。南北柵 SA5950と築地 SA6150との間は2つの官衙の間にある道路であろう（SF6503）。

**B期** 新たに掘立柱建物4棟が造営された。東西棟 SB6385・6430、南北棟 SB6172などである。SB6385は桁行7間の東西棟、SB6430は梁行4間、桁行13間以上の南北両廂付東西棟、SB6172は2間×9間の南北棟である。

- \* **C期および以降** この期のものとしては、桁行7間、梁行4間の東西両廂付南北棟 SB6173と桁行5間、梁行4間の東西両廂付南北棟 SB6460がある。両者は柱通りを揃える。SB6175は時期下がる桁行21間、梁行4間の南北に長い建物で、北側柱穴は浅く一部削平されていた。

これまでの調査で、馬寮と推定される官衙の東西幅は84mであることが明らかとなっていた

- \* が、南北長については不明であった。今回検出した築地 SA6475をこの官衙の北限とすると、南北長は252mとなる。ただし、柵 SA5950はこの築地よりさらに北に延びているので、官衙の北限はさらに北となる可能性も残る。この官衙が馬寮であることを推定してきたが、今回の発掘でも「主馬」「内廐」の墨書土器が出土し、従来の想定を強化した。なお、今回新たに検出した SB6450は、この区画内ではA期で唯一の南北両廂を有する東西棟建物であり、その規模や区画内における位置からみて、馬寮の正庁に推定される。出土遺物は少ないが、「鳴掃進兵士」が他の仕事に従事したため員数に不足を来した報告の木簡などが出土している。

## G 第71次調査

西面中門を含む第25次調査区に東接し、第50次調査区の南にあたる。馬寮の一部で、西面中門との関係からその南限にあたる地域と推測された。掘立柱建物10棟、柵7条、溝2条、井戸4基などが検出され、少なくともA～Cの3期に区分できる。

**A期** 調査地の東部を南部に走る柵 SA5950 は馬寮の東を限るもので、今回13間分を検出すると共にその南端を確認した。その結果、SA5950 は西面中門の中軸線から約4 m北のところまで延びることとなった。この SA5950 の東 8.5m の位置で柵と平行する南北溝 SD5960 は柵の南端に対応する位置で東に折れる。調査地西北部の南北棟 SB6100 は第50次調査ですでに桁行16間と判明していたが、今回南妻から3間分だけ西に廂を伴うことが判明した。調査地中央部南端、西面中門中軸線上でバラス敷面 SX7000を検出した。これは西面中門から東に通ずる道路敷の一部と推測される。バラス敷に先行して幅1.8mほどの東西溝 SD6980 がある。この溝は西面中門の中軸線上にあり、地割りに関係するものと考えられる。

B期の遺構は当調査区内では検出されなかった。

**C期** 平安時代に属する遺構で、柵3列、土塋3、井戸4などがある。

以上のほか、造営期の不明な小規模建物がいくつかあり、宮造営以前の遺構として弥生時代・古墳時代の穴や溝がある。出土遺物は瓦・土器が主なものであるが、他の地域に比較して量は少ない。瓦では藤原宮式がめだつ。

今回の第71次調査によって官衙の南の境界を明らかにすることができた。これによって、これまで行なった7回の調査を含めて、一つの官衙の全規模を明確にすることができた。

## H 第127次調査

\*

**第3段階** 馬寮推定地北辺中央部にあたり、第63次調査と東および南が接し、第59次調査区とも一部接する。検出した遺構は掘立柱建物5棟、築地塀1条、掘立柱塀1条、井戸状土塋1基である。

掘立柱建物 SB6430 は、従前の調査で一部が検出されていたが、今回桁行14間以上、梁行4間の南北廂付東西棟であることが判った。SB6469 は桁行7間、梁行2間の東西棟で、SB6430 より新しい。SB9552 は3間×2間の東西棟で、南側柱筋がSB6469の南側柱筋と揃う。築地 SA6475 は地業の痕跡を検出した。南・北に雨落溝 SD6473・6477 を伴う。SD6473の埋土上面には凝灰岩の細片が一面に認められた。この築地が馬寮の北限を画すとみられる。

## I 西一坊大路の調査

第103-14次調査は幹線下水道工事に伴う事前調査として、県道木津郡山線の西側で実施したものである。小範囲の調査ではあったが、西一坊大路 SF154 とその両側溝 SD152・153を検出し、大路幅員を明らかにした。第52次補足調査はこの北方で行なった小規模調査で、東側溝 SD152 の一部を検出した。

### 3 調 査 日 誌

#### A 第47次調査 6ADD-L・O地区

1968年5月16日～8月26日

5・16 表土の排土開始。肥土、床土（淡褐色砂質土）の順に掘り下げる。

6・3 発掘区西方（O地区）から、暗褐色斑入灰色砂質土面で遺構検出を行なうが、奈良時代の遺構は見あたらないう。

6・4 前日より1層上げて遺構検出。暗褐色斑入灰色砂質土は少量の瓦器および瓦片を含み、二番床と思われる。遺構検出面は灰褐色ないし黄褐色の粘質土で、南方では一部粘質土のところもある。68ラインまで達したところで奈良時代のものと思われる柱穴や土壇の存在を確認した。ほかに中世以降の細溝が縦横に走る。

6・5～7 引き続き遺構検出。63ラインのアゼを越えると、暗灰色砂質土の堆積が始まり、徐々に厚さを増して60ライン付近では約30cmある。この土層中には瓦、土器（瓦器、須恵器、灰釉陶器、土釜）が含まれている。北方のDライン以北ではやや薄い。西北隅で小型南北棟 SB5945、Bラインでは東西溝 SD5961 検出。溝はさらに東に延びる。Sラインアゼ以南には、埋土に瓦器・瓦を含む小さな柱穴が多数ある。

6・8 黄褐色粘質土面にて遺構検出続行。発掘区中央部にはほとんど遺構はなく、罎釜や瓦器の断片の出土が多い。

6・11 55ラインアゼに近づいたが、奈良時代の遺構が多くなる。東西溝 SD5961 はまだ東へ続き、その北側で小規模な南北棟 SB5965 を検出。溝の南方には小柱穴が点在する。

6・13 55ライン以東では再び遺構が稀薄となる。55ライン以東、SD5961 の南側では土層の堆積状況が変り、一面に灰褐色粘質土がかぶさる。この土層中には瓦・土器片（いずれも奈良時代）が入り、この上面では柱穴等の遺構は見えない。しかも厚さ20～30cmあって一度では取りつくせないで、遺構検出を中断、灰褐色粘質土の排土の

みを行なう。その下は黄褐色粘質土だが、東へ行くにしたがって黒味を帯び、褐色に近くなる。

6・14 引き続き灰褐色粘質土の排土。LB 49区で東西方向に据えられた木樋検出（SX5947）。浅く埋められており褐色粘質土面から浮いてしまうため、時期の下るものと思われた。

6・18 発掘区東端に達する。東から折り返し遺構検出再開。46ラインで南北溝（SD5960）の東肩を検出。発掘区東辺を南北に縦断する模様。

6・19 南北溝 SD5960 の西肩を検出する。幅約3mで埋土は黄褐色砂混粘土である。南方 LO48・49区にまたがって東西溝あり。南北溝にそそぐものか。溝内には瓦片がつまり、丸瓦の完形品が含まれている。田植が最盛期に入り、作業員の休みが多い。

6・21 50ラインに沿って南北堀かと思われる柱穴列を発見。北半部の7間分を検出。さらに南・北へと延びる模様。掘形は巨大で、柱間は9尺と推定される（SA5950）。

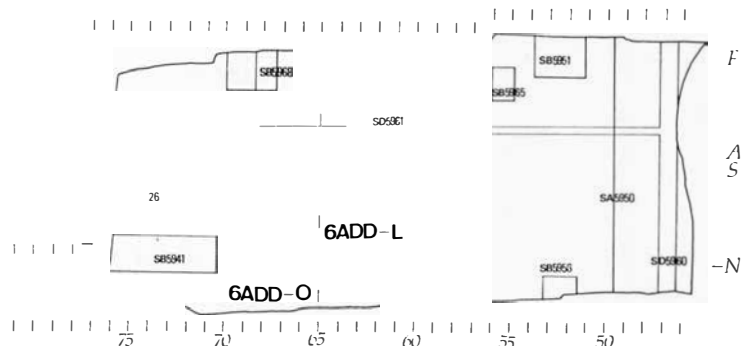
6・22 SA5950 の柱穴、Sライン以北を掘る。20～30cmで底面に達し、みるべき遺物ほとんどなし。Sライン以南では柱穴の輪郭が不明瞭であり、そのまま残して様子を見る。

6・27 西方へ進むも北半で東西溝 SD5961 を確認した他みるべき遺構なし。黄褐色粘質土層には瓦片が含まれていることが事実なため、これを排除して青灰色粘土面まで下げながら遺構検出を行なう。一方、発掘区西南隅において西方へ拡張区を設定する。幅6m、長さ30mで、西面大垣等宮西辺部の状況を確認するためのものである（西区）。

6・29 西区床土取りと並行して主調査区の精査。

7・4 西区において遺構検出。79～80ラインで南北溝、北壁沿いで東西方向の小さな柱穴列（SB5941）を検出。

Fig. 2 第47次調査地域  
の地区割と主要  
遺構



7・5 西区遺構検出終了。西面大垣に関する遺構はない。主調査区清掃。

7・10 耐圧試験。

7・22～7・26 実測。

7・27 補足調査。

7・29 補足調査。L地区南端で南北棟建物の北妻部分検出（のちSB5955となる）。

8・5 遺構の再確認。本日にて発掘調査終了。

## B 第50次調査 6ADD-M・N・P・Q地区

1968年7月12日～10月15日

7・12 肥土排土開始（西から）。

7・26 肥土取り終了。床土除去にかかる。地区杭打ち。

8・6～7 一番床を取り終り、東から折り返し二番床排土開始。50ライン付近から西では二番床は徐々に薄くなり、二番床を剥ぐと瓦片の散布が認められる。西方では既に奈良時代遺構面に達している可能性がある。

8・8 前日の所見にもとづき、西側から遺構検出開始。黄灰色粘質土面である。東西・南北に幅30cm位の溝が走る。

8・9 68ラインに沿って4個の柱穴を検出。掘形は1m角で柱根の遺存するものもある。黄褐色粘質土を掘り込んでいるが、この上に厚いところで約20cmほどの鉄分を含む褐色の砂がかぶっており、掘形はこの砂を除去しないとみえない。

8・10 68ライン沿いの柱穴と平行して、66ラインでも2個の柱穴検出。梁行2間の東西棟建物となるか。

8・13 66・68ラインに沿う2本の柱穴列は、梁行2間（柱間8尺）の南北棟と確定。Lラインが北妻となり、南は発掘区外へ延びる（10間以上、→SB6100）。

8・14～19 63ラインのアゼを越え、M・N区の遺構検出。南半のN区では小さな柱穴が群在するが、M区部分にはほとんど遺構なし。西北から東南に向って、幅2m位で

帯が認められ、古墳時代の溝と思われる。M区Oライン付近では幅3mほどの黄色土が東西に走るが、性格は不明。その南北は灰褐色土が広がる。

8・20 55ラインを越え遺構検出。M地区では現検出面下に土器・瓦片の入った層が続く。土器内面に漆の付着したものが多い。

8・21～22 50ラインで南北柵を検出(SA5950)。掘形は大きいのが不整形で浅い。柱間は10～7尺で不揃い。埋土も一定しない。NJ49には柱根遺存。49ラインには浅い南北溝あり。雨落溝か。

8・23～24 48～46にかけて遺構検出。Kラインの北側で数個の小穴を検出した。MP47に北から東へ曲る幅2mほどの溝がある。47次で検出しているものに続くと思われる(SK6098)。その南には灰褐色粘質土が溝状に広がるが、SD5960とは確定できない。

8・31～9・5 M地区Oライン付近で検出していた黄褐色土の帯を追う。東は56ライン、西はP地区に入り66ライン付近に及ぶ。版築状に盛られた形跡はなく、また南北側に広がる灰褐色土も56～66ラインで切れる。

9・6 写真撮影。

9・7 遣方設定。

9・8 水糸配り。

9・10～11 平面実測、レベル記入。Q地区で検出したSB6100の南妻を確認するため67ラインを南へ拡張する。

9・12 柱穴セクション、北壁土層図作製。SB6100は14間分まで確認。

9・16 西壁土層図作製。拡張部遺構検出。

9・17 アゼ土層図作製。

9・18 南壁土層図作製。SB6100は梁行2間、桁行16間の建物と判明。南妻には2本柱根が残る。

9・19 拡張部実測。SA5950柱穴の断面図にとりかかる。土層は複雑である。M地区47ラインM～Pにかけて南北に長い土壇発見。P地区古墳時代溝を掘り下げる。

9・20～21 SA5950土層図作製。47ライン土壇

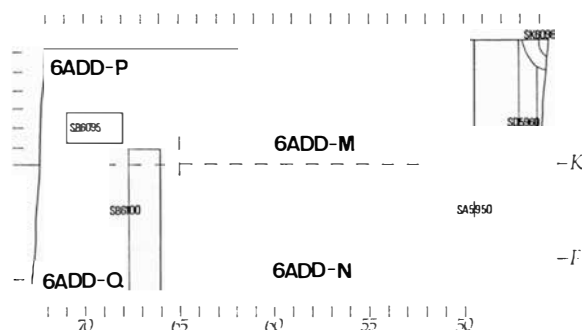


Fig. 3 第50次調査地域の地区割と主要遺構

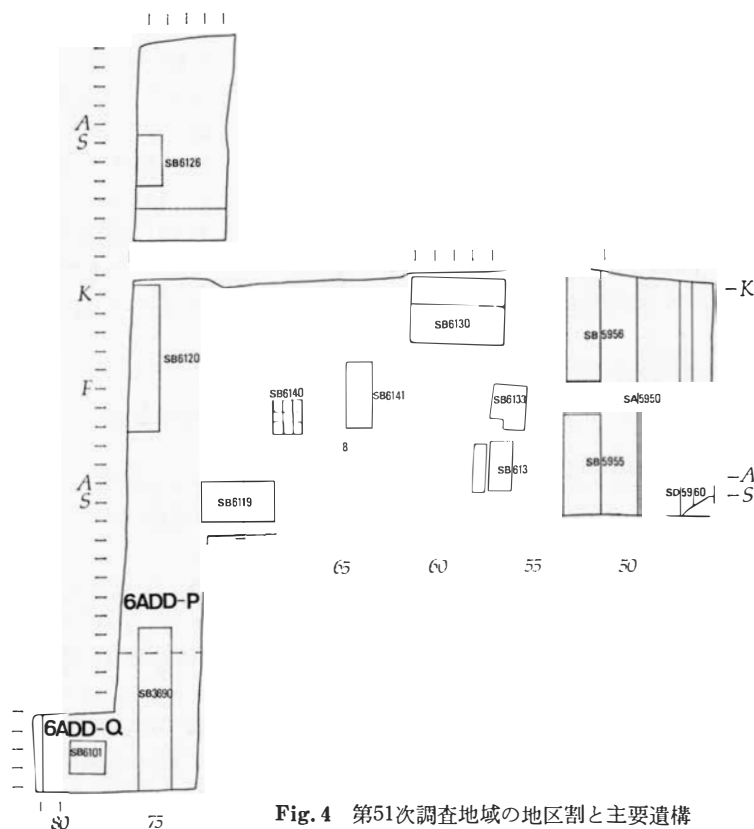
9・24 P地区西南でSB6095発見。3間×2間の東西棟で、SB6100を検出した面を下げて初めて検出可能なので、SB6100より古い。古墳時代

10・3 SD5960の写真撮影。各セクションの再検討。SD5960は地山を掘り込んだものでSA5950より古いものであることを再確認。本日にて調査終了。

## 1968年9月7日~12月11日

10・14 P地区：あい変わらず碁盤目状の細溝多く、Gライン以北やや深く掘り下げつつ遺構検出を行なう。PG74～PH75に径4mの大穴あり。P

10・16 P地区：中央部64～66ラインで5間×2間の南北棟検出（SB6141）。PG64，PE64の2カ



**Fig. 4** 第51次調査地域の地区割と主要遺構

所に中世の井戸あり。前者は北辺に井戸枠あり、後者の方は曲物の可能性あり。この付近でも瓦器が多い。西南方68～70ラインに数個の柱穴があるが、いまだまとまるまでには至らず。Q地区：Kラインおよび77ラインアゼ土層図作製。SB3690が地山面から掘り込んでいることを確認。西方で小型東西棟まとまる（SB6101）。Q地区西端で西面大垣の残存部と思われる南北方向の高まり検出。東肩かみなで断定はできない。P地区西南部で古墳時代の斜行溝が見つかる（未掘）。

**10・17** 本日でQ地区全体とP区西半部の遺構検出が一応終了した。Q地区77およびKラインアゼを除去。この状況で写真撮影。

**10・18** 写真撮影の続き。P地区中央部では併行して遺構検出を行なう。3間×3間の倉庫風総柱建物（SB6140）とその南で東西柵（SA6138）が見つかる。SB6140は柱根が5本残る。O地区東北隅には円形小柱穴が多数あるがまとまらず。中央西寄りで南北にならぶ柱穴4個検出（SB6126の東側柱列）。

**10・19** 10時までにP地区63ライン以西のすべての遺構検出完了。ただちに写真撮影に入る。午後遣方準備。

**10・21** 遣方設定。水系配り。

**10・22** 実測開始。ただしP区西端C～J区については急掘もう一層下げることにする。75ライン上に8個の柱穴がならび8間×2間以上の南北棟にまとまる（SB6120）。PH75の円形大土壙は井戸らしいので一段下げる。

**10・23～26** この間連日降雨のため作業できず。

**10・28** 実測再開。30日までかかる。この間併行してP地区西部の遺構検出を行なう。弥生時代の土壙・住居址が見つかる。

**10・30～31** 土層図作製。古墳時代の溝を一部掘り下げる。柱穴のチェック等ダメ押調査。

**11・1～19** この間、P地区東半部の床土排土作業のみで、実質的な調査はなし。

**11・20** P地区63ライン以東において調査再開。西から東へと進む。55～58ラインに細柱の小規模建物2～3棟あり柱穴埋土から罌釜・瓦器が出土する。PI58を中心に円形の土壙状のものが規則的にならぶ。性格不明の遺構である。その周囲には柱穴がある模様。

**11・21** 遺構検出東へと進む。53ラインで調査区南北を縦断する形で柱穴列検出。柵と思われるが、第47次南端でみつかった建物の西側柱列になるかもしれない。

**11・22** 昨日柵とみたものに並行して51ラインでも柱穴列検出南北棟建物になる。19間ぶんある。PD52とPF52にも柱穴があり、ここを馬道とした2棟に分れる可能性もある（SB5955・5956）。

**11・25** 19間南北棟の南妻検出のため、南で発掘区を拡張する。20日にみつかったPI58を中心とする円形土壙群は5間×2間の東西棟SB6130の内側にあること判明。50ラインで南北柵SA5950の大穴みつきり始める。

**11・26** SA5950の検出・発掘。柱穴はその西北隅に西へ尾をひく抜取穴をもつ。

**11・27～28** SA5950ほぼ掘り終る。SB6130の精査。

**11・29** 調査区東南隅に大土壙あり。南北溝SD5960を切る。PC57を中心として小柱穴多数あり、1群は9間×3間の総柱建物となり（SB6133）、その西に3間×1間の南北棟がある。

**11・30** SB6130には北側に廂がつくこと判明。従って5間×3間となる。47ラインの南北溝SD5960を掘り始める。

**12・2** SD5960完掘。発掘区東端に達し、おり返し清掃にかかる。SA5950の精査。

**12・3～9** 写真撮影。実測。

**12・10** レベル記入。柱穴の断ち割り調査に入る。

**12・11** 東南隅大土壙SK6098は第50次調査で検出していたものにつながるため、再発掘し全体を明らかにする。本日にて調査終了。

## D 第52次調査 6ADC-H・K・M・N地区

1968年11月28 18日～1969年2月26日

**11・18～29** 肥土排除（実働10日）。

**11・29～12・6** 床土排土。

**12・7** 西方の床土排土と並行して東端から遺構検出開始。床土直下の暗褐色斑混入土を取ると黄褐色土になる。この粘質土は瓦片を含み整地土と考えられる。この上面をけずり、41ラインで2条の南北溝を検出。北端は土壙で切られているか。

**12・8** 西側からも遺構検出を始める。N地区の検出面は褐色砂質土である。

**12・11** K地区：P～Oライン以南では黄褐色粘質土が灰褐色土にかわる。H地区東北の土壙はほ

とんど無遺物。M・N地区西端部では無数の細溝が縦横に走り、その間にいくつか柱穴が認められる。

**12・14** H地区東北の土壙は複雑に屈曲して45ライン以西へ延びる模様。北岸に杭列を伴う。M～N区は前日と同じ状況。柱穴が並び始めるがまだまとまらない。

**12・16** M地区の柱穴は2棟の東西棟にまとまる。北のSB6195は5間以上でさらに西へ延びる。南のSB6185については規模不明確。Rライン以南K地区になると遺構検出面上に砂の堆積があ



る。

**12・17** M地区でSB6188・6180を発見。共に東西棟になりそう。H地区東北の大土塋SK6155は46ラインで南へ屈曲する。HB46で木筒が1点出土した。

**12・18** M・N地区は60ラインアゼまで、H・K地区は50ラインまで達する。M地区ではSB6188の南で東西塋SA6186を新たに検出。H・K地区では、49ラインで南北に縦断する溝、その西50ラインにかけてSA5950の掘形3個検出。灰褐色整地土を切っていることが判明した。

**12・19～24** 50～60ライン間の灰褐色土の排土。

**1・7** 謹賀新年。遺構検出再開。H地区西南隅でSB6180の東妻検出。5間×2間東西棟と確定。57ラインで南北にならぶ柱穴5個発見。50ラインアゼの土層図作製。

**1・8** 50ラインのアゼ除去。下でSA5950の掘形南半の9間分検出。N地区56ラインで比較的大きな柱穴6個が南北に並ぶ。

**1・9** SA5950の柱穴はほぼ出そろう。南から4番目のものには柱根遺存。H地区西北の南北柱列は6間以上×2間西廂付南北棟になる(SB6173)。

**1・10** SB6173にはさらに東廂がつく。これと重複してさらに南北柱穴列2条あり。K区56ラインで検出していた南北柱穴列に対応するもの54ラインで発見。これに重複して47次から続く南北棟SB5951の北妻柱をHR53で検出。桁行14間となる。

**1・16** KJ56で井戸検出(SE6166)。井戸枠は1辺130cmの方形。本口5段分を掘る。H～M地区にかけてSB6187検出(2間×1間東西棟)。

**1・17～18** 井戸SE6166の掘り下げ。240cmで底に達する。パラス敷。側板は10段。45ライン以東の灰褐色土を掘り、清掃を行なう。M・K地区にかけて検出していた東西棟SB6185は南にのびて北廂付建物になる。

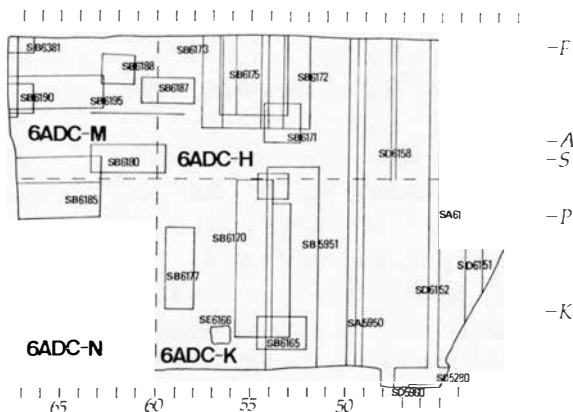


Fig. 5 第52次調査地域の地区割と主要遺構

**1・19～23** 雨・清掃の繰り返し。

**1・24～25** 写真撮影。

**1・27** 遺方設定。

**1・28** 水系配り。

**1・30～2・5** 平面実測およびレベル記入。

**2・6** 補足調査。SE6166の東南隅外側を掘り下げ。枠板1段毎に土を叩いて積んでいる。SA5950の部分写真撮影。

**2・7** 補足調査。写真撮影。

**2・8** 補足調査。柱穴の断ち割り。45ラインで南北溝検出。整地土層から掘り込んでいるので見えにくい。発掘区東南隅で東へ折れ曲り、37次の東西溝SD5280に接続する模様。

**2・12** 補足調査。43ラインで幅広の南北溝発見。45ライン南北溝との間は築地となるか。東南隅東西溝内で暗渠SX6514発見。

**2・13～21** 51～57ラインの間、南へ拡張、47次と重複させてSB5951の妻柱を検出。3間×14間となる。

**2・25** 南拡張部の写真撮影。SD6151・6152を北まで掘り下げる。これらより東西溝SD5280が新。

**2・26** 築地SA6150および両雨落溝の写真撮影。実測。本口にて調査終了

## E 第59次北調査 6ADC-M・N・O・P地区

1969年12月20日～1970年4月3日

**12・20～1・14** 表土排土(実働10日間)。

**1・16** 床土排土開始。

**1・20** 床土取りと併行して、O地区西側から遺構検出。検出面は黄褐色粘質土で、整地土と考えられる。

**1・21** O地区: 81ラインで細い南北溝検出。その東側に4個の南北柱穴列あり。うち3個には底に埴を敷く。東西棟の可能性あり。

**1・22～24** O地区: 遺構検出75ラインまで達し、埴を敷いた柱穴群は二面廂付南北棟にま

りそう(SB6401)。

**1・26** N・P区北から遺構検出。N区東半で多数の柱穴検出。複雑に重複し、いまのところ建物にまもらず。P地区ではめぼしい遺構なし。

**1・27** M地区も南から遺構検出。柱穴と思われるものはあるがまもらない。M・P地区は新しい溝などのみ。

**1・28** M地区Aラインで東西溝SD6181検出。N・P地区Mラインに東西溝あり。整地土を切り込む。この溝底73・74で柱穴検出。建物にま

1・29～31 床土取りのみ。

2・3~4 N・P地区の南から折り返し遺構検出。東端で総柱のSB6330を発見。3間×3間か。黄灰砂地山面から掘りこみ、一部に柱根が残る。N・P区境南端でSB6342, SA6341検出。75~77ラインにかけて地山がさがり厚く整地土堆積(のち大十壙SK6350となる)。铸造関係の遺物が多い。

2・6～7 土壙SK6350をPラインまで掘る。埋土は2層からなる。土壙の西側に炭化物混りの小ピットが群在する。M地区：B～Gラインにかけての多数の柱穴はSB6190・6245・6195などにまとめるが、まだまだとまらぬ穴もある。

2・10～12 M地区：H～L ラインまで遺構検出。SB6195は2間×7間の南北棟にまとまる（のちさらに北へのびることとなる）。6間以上になる4本の東西柱穴列を検出する。いずれも東西棟になる。残り部分（79～82、H～Lにかけて）を拡張することとし、表土取りを行なう。

2・25～3・1 雨のため作業進展せず。

3・6 O地区：SB6400は二面廂付南北棟になり、Gラインよりさらに南へ延びる。Hライン以南には底に塙を敷く別棟が重なる。M・O地区にかけてAライン沿いに東西溝あり。南北土塙SK6350はBラインよりさらに北へ延びるが、東西溝はここを越えさらに西へ延びる。前後関係は不明。81ラインに南北溝検出。位置的に西面大垣に関係するものと思われる（SD6303）。

3・9～12 M・O地区の遺構精査。SB6400の南妻をBラインで検出。11間以上となる。77ラインで大きな掘形列がみつかる。59次南でみつかった柵 SA3620のものではないか。その東には小さな南北柵 SA6402あり。M地区：SB6190・6381・6195・6387等重複する建物の柱穴切り合いを検討する。断ち割り調査で結論を得たい。

3・18 SK6350をほぼ掘り終る。底部で南北柵SA3680を検出。したがって土壙より古いことに



なる。

3・19 写真撮影準備。完全に終らぬうちに降雪。

3・20 再び清掃後写真撮影。

3・23～28 遺方設定。実測。

3・30～4・3 補足調査。これにて調査終了。

## F 第59次南調査 6ADD-O・P・Q地区

1970年1月6日～4月1日

1・23 床土を除去しながらO地区西側から遺構検出を開始する。北半部は黒褐色土面であるが、瓦片を含み整地土と考えられる。OR80で柱穴1個検出。整地土面は南端部で急激に落ちる。

1・24～25 O地区遺構検出。OR80から10尺東でさらに柱穴1個発見。南端の落ちは土壌となる。77から78ラインにかけ2条の南北溝検出。溝底で径1mばかりの柱掘形がみえ、南北に並ぶ模様。

1・27 77ラインで南北柱穴列確認。前日検出面より10cmほど削り始めて見つかる。Rラインで見つけていた東西柱穴列は3間分でこの南北柱穴列に重なる。

1・28 午前中清掃。昼写真撮影。P・Q地区耕土とり。

1・29 O地区遺方設定。P・Q地区耕土排土。

1・30～2・17 P・Q地区耕土・床土排土。床土は5～7cmと薄い。この間2・3・4両日O地区実測、南北柵と東西柵がクロスするOR77の掘形を断ち割った結果、掘形は一つであり、2本の柵は同時存在と判断した。2月6日O地区埋戻し。

2・18 P・Q地区南から遺構検出開始。77ラインの南北柵(SA3680)、南半部6間を検出。76～77にかけて大きな土壌によって失われている。78ラインI～Kにかけて2間分の柱穴列あり。南北棟になるか。

2・19 Cラインまで、P地区南半の遺構検出。PL79で井戸発見(SE6300)。井戸枠内から鬼瓦・瓦器等出土。81ライン西に南北溝検出。59次北で検出のものと一連になるだろう。PJ78付近に古墳時代の溝がある。

この間しばらく調査中断。

3・23～24 P地区北半部の遺構検出。SA3680を10間分検出。その西に重複して新しい南北柱穴列あり。一部に柱根残る。51次調査で検出したものにつながり、8間×3間の南北棟としてまとまる(SB6120)。

3・25～26 写真撮影後、遺方設定。実測。

3・27～28 ダメ押調査。

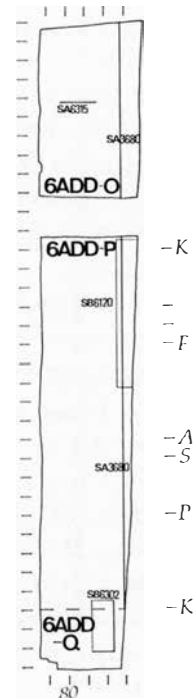


Fig. 7 第59次南調査地域の地区割と主要遺構

## G 第63次調査 6ADC-G・H・L・M地区

1970年5月1日～7月27日

5・1 発掘地区設定。肥土除去作業を開始する。

5・11 手作業による肥土排土が進捗しないので、バックフォアを導入する。

5・14 三角測量により基準杭設定。

5・19 地区杭打ち。

5・20～6・1 床土排土。5・22にはバックフォアによる肥土排土終了。G・H区の中央と東とでは床土下位の土層の状況が異なり、中央では灰褐色砂質土、東部では赤褐色土である。

6・2 G・H区中央から遺構検出開始。N～R

50で南北方向の溝、HK50でSA5950の柱掘形と思われるもの検出。また、G区Cライン以北に沼状の落ち込みがある。東半では床土取り続行。

6・3 G地区：A49で柱根の残る大きな柱穴1個とその北に掘形の一部を検出。SA5950の一部であろう。この柱穴は砂層(地山か)から切り込んでおり、その上の青い斑入りの粘土層を取らないと検出できない。H地区：50ライン地山面で幅1mの南北溝を検出。たまりの所で檜皮多数出土。G～I52で柱穴3個検出。南に続く建物の一部である。

6・4 G地区：昨日H地区で検出した南北溝はG地区では幅1.5mで、Cラインで終り西方へ土壙状に広がる。H地区：52ライン沿いの柱穴は4間分となり、Jが北妻となる建物にまとりそう。

6・5 G地区：A～D49でSA5950の一部と思われる柱穴4個検出。一番北側のものはDラインの東西溝によって切られている。この溝から木簡出土。Cライン50～52に築地様のもの出る。H地区南端53ラインで柱穴3個検出。

6・6 G地区：東西築地はさらに西に続く（SA6475）。南側の溝は53ライン付近で狭くなる。G・H区L～S53ラインで9間分、O～Rラインで3間分の柱穴検出（SB6175の東半部）。H地区南方では52次で検出したSB6172の北妻と思われる柱穴3個などがみつかる。

6・9 H地区：52～54ラインにかけ続々と柱穴がみつかる。SB6175・6172のほかに2棟ほどまとりそう。

6・10 H地区：56ラインアゼの東側で南北柱穴列11個検出（SB6175身舎西側柱）。その東で54・55ラインにかけ5間×1間の南北棟がまとまる。のちSB6460の東半となる。

6・11 東側の床土取りすべて完了。西側の床土取りに移る。

6・27 M地区西端から遺構検出再開。北で3間×2間の東西棟が1棟まとまる（SB6453）。その東南で南北両廂付の東西棟がでる。1間3mあり正庁か。L地区は何もなし。

6・28 M地区：二面廂付東西棟は4間×7間になるとと思われる（SB6450）。これに重なる新しい時期の柱穴あり、2間×5間の南北棟にまとまる（SB6451）。H地区56ラインのアゼ西側がSB6450の東妻になるはずだが、妻柱なし。替りに重複しながら南北に連なる多くの柱穴あり。一部はSB6175の西廂、また一部はSB6460のものである。

7・1 50ライン以東で遺構検出。柵SA5950の柱穴はなかなか判別し難く、白味を帯びた砂質土

まで掘り下げて検出。

7・2 G・H区双方でSA5950が出かかる。検出面は空色の粘質土で、埋土は黒っぽい色を帯びる。SA5950のすぐ東に南北溝あり、北の築地SA6475をこえて発掘区北端まで延びる。溝中から畜串出土。

7・3 SA5950柱穴検出困難なため、さらに掘り下げてみる。Dライン溝以北でも3個連なった柱穴検出。発掘区外北へさらに延びる模様。東側の南北溝は柵の柱穴を埋め埋土した後には設けられている。盛土を除去し地山まで下げないと柱穴は見えない。H区西南部で、58ライン西でSB6450のもの以外に4間分の柱穴検出。

7・4 SB6450の柱穴すべて出揃う。北廂部分のみ柱根遺存、すべて八角形に面取りしている。柵SA5960の東側で、52次に続く溝2条検出。GM182これらを切る新しい東西溝検出。H区西南隅に4間×1間の南北棟まとまる（SB6454）が、妻は不明。

7・7 G・H区47～48ラインに南北溝1条検出。Kあたりで途切れる。L・M地区にピット群でるが、現在のところまとまらず。

7・8 GC56で土壙検出。瓦器・木の葉など出土。H区46ラインに溝の西肩でる。

7・9 45・46ラインの溝掘り下げる（SB6152）。G地区でA・Bラインに東西溝検出。西側から続くものと思われる。

7・10 G地区：46ラインで溝の西肩検出。Bラインで東へ折れ、ここで暗渠あり。

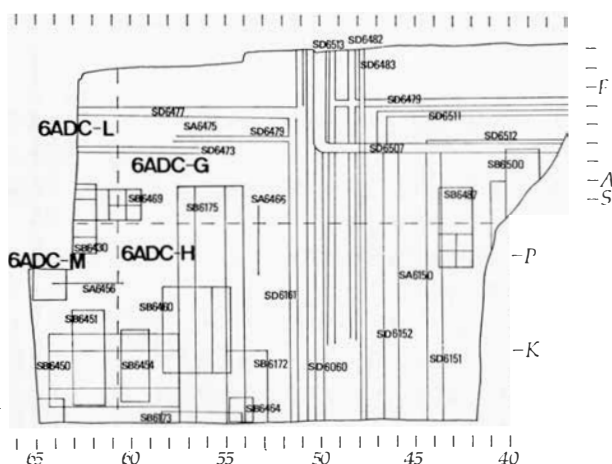
7・11 G区40ライン以東、用水路まで拡張（63次補足と呼ぶ）。

7・13 拡張部床土取り。G区42ラインで築地東側の溝が見えはじめる。

7・15 G区40ライン西側で数本の東西溝検出。一番北側の溝から木簡出土（SD6499）。S～Rにかけて南北棟と思われるものの柱穴6個検出。L地区で柱穴2個検出。南北両廂の東西棟か。

7・16 G・H区にかけて昨日みつけた柱穴、25

Fig. 8 第71次調査地域の地区割と主要遺構



間×2間でまとまる(SB6487)。G区西端で2間×3間の東西棟検出(SB6453)。写真撮影準備。

7・17 写真撮影。

7・18 遺方設定。

7・20 水系配り。

7・21～22 平面図作成。

7・23 レベル記入。

7・24～27 土層図作成。柱穴断ち割り等の補足調査。

8・3～5 G区東の拡張部遺構検出。東西溝4本と建物1棟検出。南の2本は重複する。建物は2間×4間以上の南北棟となるが(SB6500)、北妻は溝底でみつかったため溝より古い。北の溝は西方で土壌状に広がり、ここから木簡10点出土。兵士関係の記載と天平9・10・11年の紀年あり。

8・3 拡張部写真撮影。

8・19 遺構の再確認。本日にて調査終了。

## H 第71次調査 6ADD-N・O, 6ADE-A-B・K地区

1971年2月22日～4月10日

2・22 バックフォールによる盛土および表土の除去作業開始。

2・23 上記作業と併行して、手作業によって床土およびその下の茶褐色粘質土を排土しながら遺構検出を開始する(東から)。茶褐色粘質土は多量の瓦を含む。N地区では南北に並ぶ柱穴6個(うち3個に柱根残)を検出するも、一連のものはまだ不明。A区東端で新しい土壌が半分かかる。

2・24 床土・茶褐色粘質土を取りながら遺構検出。49～52ラインまで進む。50ラインで大きな柱穴(SA5950のもの)が一部あらわれる。埋土は黒褐色土で2～3m大。

2・25 バックフォールによる排土はほぼ終了。引き続き床土および茶褐色粘質土を除去しつつ遺構検出。55ラインに近づく。Nライン以南では茶褐色粘質土の上に土師器細片を含む黒褐色土がのる。遺構はほとんどなし。

2・26 57ラインまで進む。N地区S56を中心に方形の土壌あり。その西に細長い南北溝。B地区Q57でバラス敷検出。さらに西へ続く模様。

2・27 床土・茶褐色粘質土の除去60ラインまで完了。本格的に遺構検出をしながら東へ戻る。B区のバラス敷は幅1.5mで、南北は新溝で切られている。路面の一部であろう。N地区では小柱穴が無数に見つかりつつある。また、古墳時代の溝を一部検出。

3・1 B地区バラス敷は57ライン付近で途切れる。B地区北からN地区Rラインにかけ多数の小

柱穴検出。柵4, 建物3がまとめられた。

3・2 NS55～NB55にかけ2つの大土壌を掘る(SK7040・7041)。南のものが新しく黒色土器、土師器小皿出土。北のものは奈良末か。NN53の西北で柱根跡と柱穴検出。柵SA5950の一部か。

3・4 Q・K地区西端から床土排土開始。

3・5 東半54～49ラインで遺構検出。49ラインでSA5950の掘形を確認。顕著な遺構あまりなく、NC53に井戸(曲物を作る)1基があるのみ。

3・6 SA5950の抜穴・掘形を掘り下げる。南端がAR49にあることを確認。その南に小規模な井戸発見。埋土に黒色土器含む。めぼしい遺物なし。

3・8 SA5950の調査。掘形と抜取穴との判別は極めて難行。48ラインC～Sに浅い溝あり。

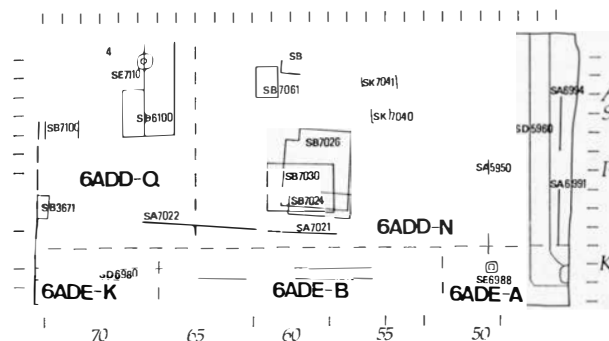
3・9 W・A地区東端に達する。46～47ラインで幅3mの南北溝検出(SD5960)。西側にオーバーフローしている様子。AQ46でSD5960は東に曲る。Qラインに東西溝がありSD5960に切られている。この東西溝(SD6980)は60ラインのセクション所見でバラス敷の下から切り込んでいる。

3・10 午前中写真撮影準備。午後写真撮影。Q・K地区床土排土。

3・11 写真撮影続行(午前)。引き続き、調査区東半部につき遺方設定。Q・K地区の床土排土。

3・12 午前中水系配り終了。午後実測開始。プランは8割完了。Q・K地区床土取り。

Fig. 9 第71次調査地域の地区割と主要遺構



3・13 プラン終了。レベル記入も終了。Q・K地区床土取り。

3・15～16 SA5950 柱穴断ち割り、井戸の写真撮影。土層図作製。Q・K地区床土取り。

3・17 60ライン以西（西地区）床土排土終了。東から遺構検出開始。

3・18～19 遺構検出67ラインまで進む。B地区バラス敷は62ライン付近でなくなる。バラス下層の東西溝は西方へ延びる。N地区西北で建物1棟（2間×2間）の他、弥生時代ピットおよび古墳時代溝があるのみ。古墳時代溝はN・Q区境を北上し50次調査区へ連なる。

3・22 67ラインで、50次調査において北半を検出していた南北棟建物 SB6100 の西側柱列と南妻を検出。南から6番目の柱穴は大きな土壙によってこわされている。B～K地区南端に古墳時代の東西溝あり。

3・23 SB6100 は15間×2間に確定。西側に柱筋を揃えて3間分の柱穴検出。別建物と推定する（のち西廂に訂正）。90ライン以西L～O間には暗

灰色土が広がり、遺物を多量に含むため掘り下げ。K区下層の東西層70ラインまで掘る。

3・24～25 遺構検出西端まで達する。Q区西北隅で3間×2間の東西棟建物、QO07で方形の井戸検出。井戸埋土から10世紀後半の土器出土。B区下層東西溝は西端まで存在。

3・26 写真撮影準備。

3・29 写真撮影。のち遣方用杭打ち。

4・2 午前中遣方設定。午後水系配り。

4・3 西地区平面実測。東地区：SD5960掘り下げ、北端から、青色砂までさげる。出土遺物は瓦のみ。

4・5 午前中にて平面図完了。レベル記入と共に土層図作製にとりかかる。東地区はSD5960の掘り下げ。

4・7 南北溝 SD5960掘り下げ。

4・9 遺構の再検討。

4・10 古墳時代・弥生時代の溝を精査。一部掘り下げて実測。建物の柱穴断ち割り。実測。柱根等とり上げ。本日にて調査終了。

## 第127次調査

### 6ADC-L地区

1980年10月13日～12月1日

10・13 縄張り。第59次北・63次調査区と一部重複させて調査区設定。

10・15～27 バックフオーなど重機により表土排土開始。

10・23 トラバースにより基準点移動。

10・25 西側から床土を排土しながら遺構検出を開始する。床土下は黄褐色土で、南北に走る耕作溝があるのみ。第63次調査時より一層上である。

10・26 引き続き黄褐色土面で遺構検出。68ラインまで進む。遺構は中世から現代までの溝および土壙のみ。

10・28～30 床土排土東端まで完了。一部では地山（淡茶褐色粘質土）がみえる。東南隅で、既掘部分より高いレベルで掘形検出。SB6430のものと思われる。

10・31 黄褐色土を削り、本格的に遺構検出を行なう（東から）。SB6430の南廂部分が明確化するが、北側はまだ掘り足りないか。SB6430の北半に重複してSB6469を検出。63次調査と合わせ7間×2間の東西棟にまとまる。北半部は整地土厚く今のところ遺構なし。

11・1～5 引き続き遺構検出。SB6430は70ラインまで検出。まだ妻とならず。68・70ラインでSB6430を切る柱穴列あり。南北棟建物になるか。北部で築地の南北雨落らしき2条の溝あり。両者の間は茶褐色砂質土となる。掘込地業か。

11・6 遺構検出西端まで達する。SB6430は西妻にまで至らず、4間×13間以上となる。築地S

A6475の茶褐色粘質土上に3間×4間の総柱建物あり。柱穴小さい。南雨落溝は上・下2層ある模様で、上層には凝灰岩くずがつまる。

11・7 検出し足りない遺構の調査のため、薄く削りながら東へと戻る。

11・10 写真撮影準備。午後3時から全景のみ撮影。

11・11 午前写真撮影。午後遣方設定。

11・12 水系配り。

11・13 実測。平面図終了。

11・14 レベル記入。土層図作製。

11・19 井戸断ち割り。アゼはずし。

11・21 築地南雨落溝の掘り下げ。

11・25 築地北雨落溝の掘り下げ。

11・26 築地およびSB9553等写真撮影。

11・27～28 柱穴等の断ち割り調査。後写真撮影および補足の実測。

12・1 調査終了。砂入れ後埋戻し。

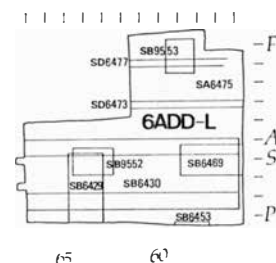


Fig. 10 第127次調査地域の地区割と主要遺構